仙台市文化財調査報告書第31集

仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

昭和56年3月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

仙台市文化財調査報告書第31集

仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

昭和56年3月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

序　　文

最近、都市圏の拡大に伴う都市問題が表面化しつつあり、都市環境の整備、充実や住宅問題等より、公共事業の増大が顕著になってきています。このような状況の中で、これまで受け継がれてきた種々の文化遺産が煙滅しつつあります。これら先祖が鋭意きづいてきた文化遺産をいかに保存し、次代に継承していくかということも立派な都市行政問題であります。

昭和51年に茂庭住宅団地の計画が示され、それに基づいて、仙台市教育委員会では、住宅団地造成工事地内及びその周辺の分布調査を実施しております。昭和53年度に試掘調査が実施され、昭和54年度には「沼原・嶺山・梨野」地区の５遺跡７地点の発掘調査を実施し、縄文時代から平安時代までの各種の遺構が発見されています。

昭和55年度は昨年度に引続き「沼原・嶺山・梨野」地区の７遺跡11地点の発掘調査を実施し、縄文時代の各種の土壙、平安時代の製鉄遺構等が発見され、大きな考古学的成果を上げています。本書は昭和55年度についてまとめ上げました貴重な報告書であります。

最後に調査に際して種々の御協力を賜わりました開発局宅地課の皆々様に御礼を述べるとともに、本書が学兄諸氏、市民の皆様の貴重な文献資料として永く後世に継承され、活用されますことを切に念願する次第であります。

昭和５６年３月

仙台市教育委員会　教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、茂庭住宅団地造成工事に係る、沼原Ａ遺跡・沼原Ｂ遺跡・沼原Ｃ遺跡・嶺山Ａ遺跡・嶺山Ｂ遺跡・嶺山Ｃ遺跡・梨野Ａ遺跡の発掘調査略報告書である。尚、本調査は昭和55年４月７日に着手し、昭和55年11月28日に終了した。

2．本書収録遺跡の発掘調査は、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。

3．本書に掲載した地形図は、建設省国土地理発行の２万５千分の１「仙台西南部」を復製したものである。

4．発掘調査にあたっては、東北歴史資料館技師岡村道雄、金属博物館学芸員野崎準の両氏の御教示を得た。

5．本書作成にあたり、阿部朝衛（東北大学院生）、熊谷信一、木戸春夫、高橋研一、石垣純子、天野エリ子、叶文俊（以上東北学院大学生）の各氏の協力を得た。

6．本書の執筆、編集は佐藤甲二、篠原信彦、斎野裕彦、加藤正範が担当した。

7．本年度調査区は、SCREEN-TONE で表した。

8．本文の執筆担当者名は文末に記した。

9．本書に関する遺跡からの出土遺物は仙台市教育委員会に一括保管してある。

目　　次

調　査　概　要……1
Ⅰ．沼 原 A 遺 跡……3
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅱ．沼 原 B 遺 跡……7
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅲ．沼 原 C 遺 跡……10
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅳ．嶺 山 A 遺 跡……13
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅴ．嶺 山 B 遺 跡……19
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅵ．嶺 山 C 遺 跡……23
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅶ．梨 野 A 遺 跡……29
1．遺跡の立地　　2．調査の方法
3．調査の概要　　4．まとめ

1．綱木遺跡　2．梨野B遺跡　3．梨野D遺跡　4．青葉山遺跡　5．梨野横穴群　6．茂庭大館
7．カナクソ遺跡　8．けんとう城跡　9．向根遺跡　10．峯　館　11．本郷遺跡　12．茂庭西館
13．向根東遺跡　14．向根横穴群　15．嶺岸遺跡　16．門野山田遺跡　17．坂ノ下遺跡　18．新熊野遺跡
19．町田遺跡　20．人来田A遺跡　21．人来田遺跡　22．町北東遺跡　23．西前遺跡　24．中ノ瀬遺跡
25．新組遺跡　26．人来田C遺跡　27．小塚西遺跡　28．人来田B遺跡　29．塩ノ瀬遺跡　30．川添東遺跡
31．大貝中遺跡　32．青木沢遺跡　33．ノマヤマ遺跡

第1図　茂庭住宅団地造成工事地区と周辺の遺跡

調　査　概　要

茂庭住宅団地造成工事は、東西を名取川に向って北から南へ流れる大堤川・岩ノ川、南北を茂庭低地・梨野平坦面[註1]とする間にひろがる丘陵部の約 130haを開発対象面積としている。これら丘陵地の標高は約100～200m程で、その内部には窪地地形と称される大きく凹んだ場所が数ケ所みられる。

昭和53年度の試掘調査に始まる発掘調査は、今年度で調査最終年度をむかえる。本格的に調査が行われたのは昨年度からで、５遺跡７地点がその調査対象となり、沼原Ａ遺跡等より縄文時代、弥生時代、平安時代の住居跡、土壙、ピット、遺物包含層等が検出あるいは確認された。[註2]

今年度の発掘調査は昭和55年４月７日に開始され、11月28日までの約８ケ月間調査が行われた。調査箇所は，昨年度よりの継続調査である沼原Ａ遺跡第１・２地点、沼原Ｂ遺跡第１地点、嶺山Ａ遺跡、梨野Ａ遺跡と今年度新に調査した沼原Ｂ遺跡第２地点、沼原Ｃ遺跡、嶺山Ｂ遺跡、嶺山Ｃ遺跡第１～３地点から成る７遺跡11地点である。梨野Ａ遺跡を除けば他は全て造成地内南部の「沼原」・「嶺山」両地区に調査箇所が集中している。調査対象総面積約15,500㎡、発掘総面積は6,500㎡にのぼる。

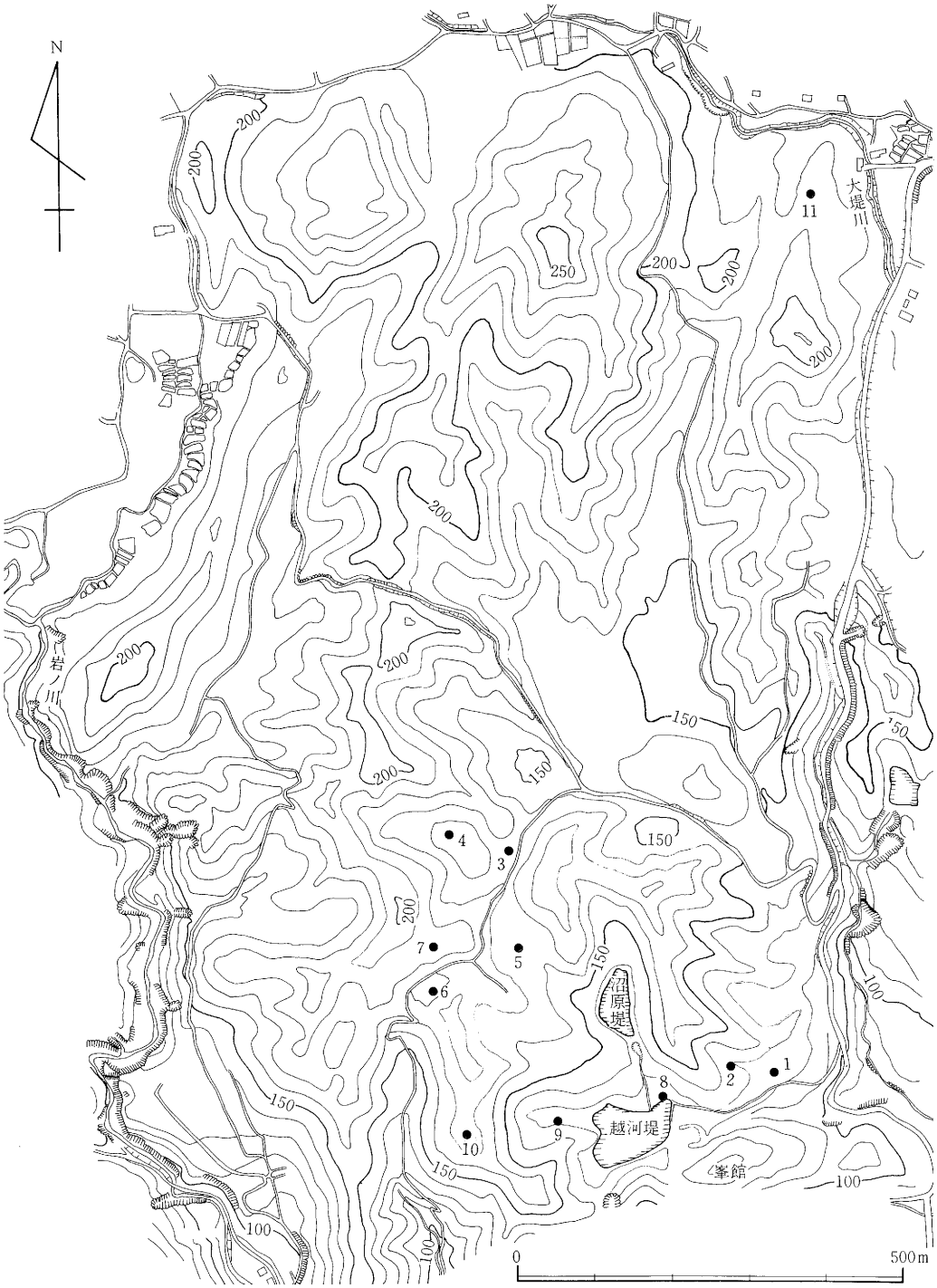
「沼原」・「嶺山」地区の調査ではほとんどの遺跡より縄文時代の遺物包含層が確認され、縄文時代の遺構として沼原Ａ遺跡第２地点（２基）、嶺山Ａ遺跡（６基）、嶺山Ｂ遺跡（１基）の各遺跡より、昨年度沼原Ａ第１地点で出土した土壙（中段を有する土壙で、平面形が上端楕円形、中段・下端が隅丸長方形を呈し、上端190×150cm、中段150×60cm、下端140×40m・深さ160m前後のもので、覆土内よりはほとんど遺物を出土しない）とほぼ同様な形態・規模のいわゆる「Ｔピット」[註3]・「陥穴」[註4]と呼ばれている土壙（以下文中に於いては、この種の土壙は全て「Ｔピット」という名称を用いることとする）が検出された。「Ｔピット」が今回谷部分（沼原Ａ第２地点・嶺山Ａ）より検出されたことは、その性格を考える上で興味を引く。

嶺山Ｃ遺跡第２地点よりは平安時代の製鉄跡が検出された。製鉄跡の調査では時代を決定する遺物の出土が数少ない上に、東北地方では製鉄跡の調査事例が希である。しかるに、当遺跡が遺構内伴出遺物によって時期決定が可能であることは貴重な資料といえる。

「梨野」地区の梨野Ａ遺跡の調査では、縄文時代早期～後期・古墳時代中期の遺物が出土し、縄文時代中・後期を中心とする多数の土壙、ピットが検出され、調査外地区に住居跡群のある可能性を濃厚にした。

以上のような本年度成果をもって茂庭造成団地内遺跡の調査は完了した訳であるが、梨野Ａ遺跡は本年度調査区外の部分が保存される見通しとなり、来年度範囲確認調査が行われる予定である。

（佐藤甲二）



1．沼源A第1地点　2．沼源A第2地点　3．沼源B第1地点　4．沼源B第2地点
5．沼　源　C　6．嶺　山　A　7．嶺　山　B　8．嶺山C第1地点
9．嶺山C第2地点　10．嶺山C第3地点　11．梨　野　A

第2図　1980年度調査地点

沼　原　A　遺　跡

（C－247）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：第1地点　昭和55年4月8日～4月20日

第2地点　昭和55年4月24日～6月14日

対象面積：第1地点　600㎡　第2地点　740㎡

発掘面積：第1地点　110㎡　第2地点　740㎡

担当職員：斎野裕彦・佐藤甲二

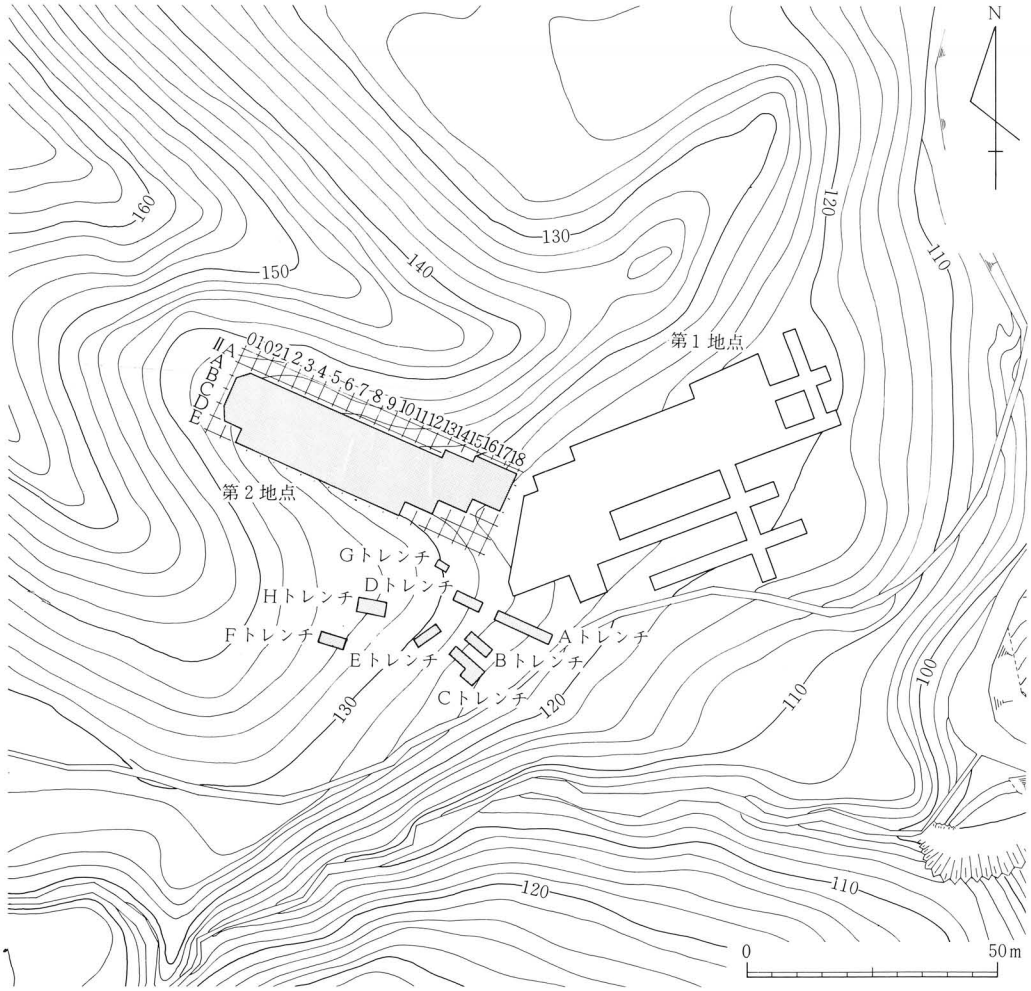
1．遺跡の立地

沼原Ａ遺跡は、造成地南東端の丘陵中段に位置し、標高120～125mの間にひろがる平坦部分（第１地点）と、この北西奥の全長約60m、幅15mの谷部分（第２地点）から成る。沢をはさんだ南西側には峯館がそびえ、この沢の上流約150mには嶺山Ｃ遺跡が位置する。昨年度調査の結果、第１地点では、平安時代の住居跡１棟、縄文時代の「Ｔピット」６基が検出され、第２地点（試掘調査）では、平安時代の包含層と縄文時代の土壙１基が確認された。

2．調査の方法

○第１地点　昨年度調査住居跡の南西側と西側の丘陵緩斜面上に数ケ所みられる狭い平坦部分を調査対象とし、幅２～４ｍのトレンチ７本（Ａ～Ｇ）を設定し調査を行う。

○第２地点　谷全体を調査対象とし、昨年度設定グリッド（３×３ｍ）により調査を行う。



第１図　グリッド・トレンチ配置図

３．調査の概要

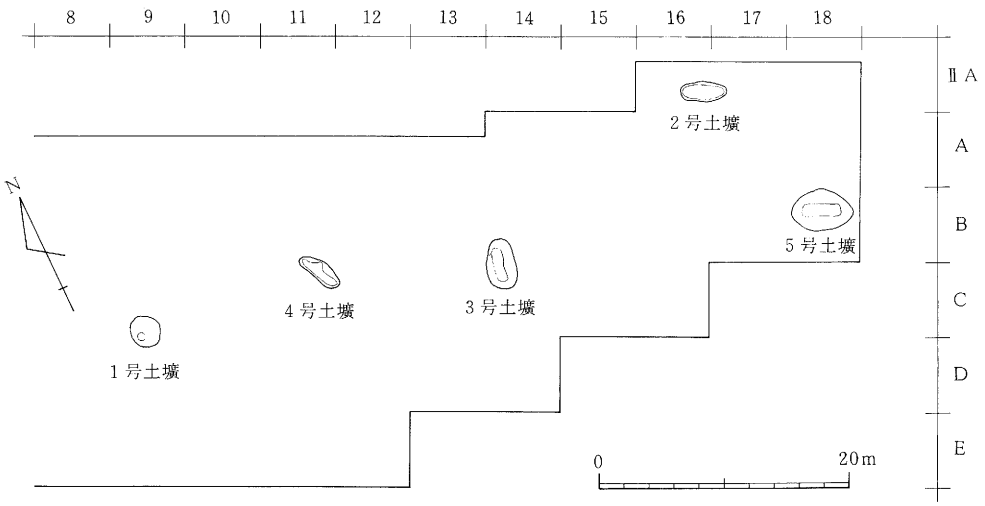
第１地点では耕作土（約10～20cm）下が地山となり、Ｃトレンチで時期不詳の小土壙を１基検出した以外は、遺物、遺構は検出されなかった。第２地点では、基本層位が第Ⅰ層耕作土から第Ⅶ層地山までの７層から成る。第Ⅳ層から平安時代、第Ⅴ層下部・第Ⅵ層よりは縄文時代前期～晩期の遺物を出土する。平安時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代の土壙５基と若干の焼土のひろがり１ケ所が検出された。

〈土壙〉第２地点より５基検出された。これらは上端約200×150cm 深さ約150cmの「Ｔピット」（３・５号)、底面に小ピット１つを伴い、上端（180×70cm）下端とも隅丸長方形の平面プランを呈し深さ約25cm前後の浅い土壙（２・４号)、そして斜めに掘り込まれた上端（径約140cm)、下端とも不整円形の平面プランを呈す深さ120cmの土壙（１号）の三形態に大別される。これら土壙は堆積土より遺物を出土しなかったが、第Ⅵ層中より掘り込まれており縄文時代晩期以前の時期に所属するかと思われる。

４．まとめ

○第１地点では、時期不詳の土壙が１基検出された以外、平安時代の遺物・遺構のひろがりはみられない。斜面上の狭い平坦部分は、耕作によって造り出されたものと考えられる。

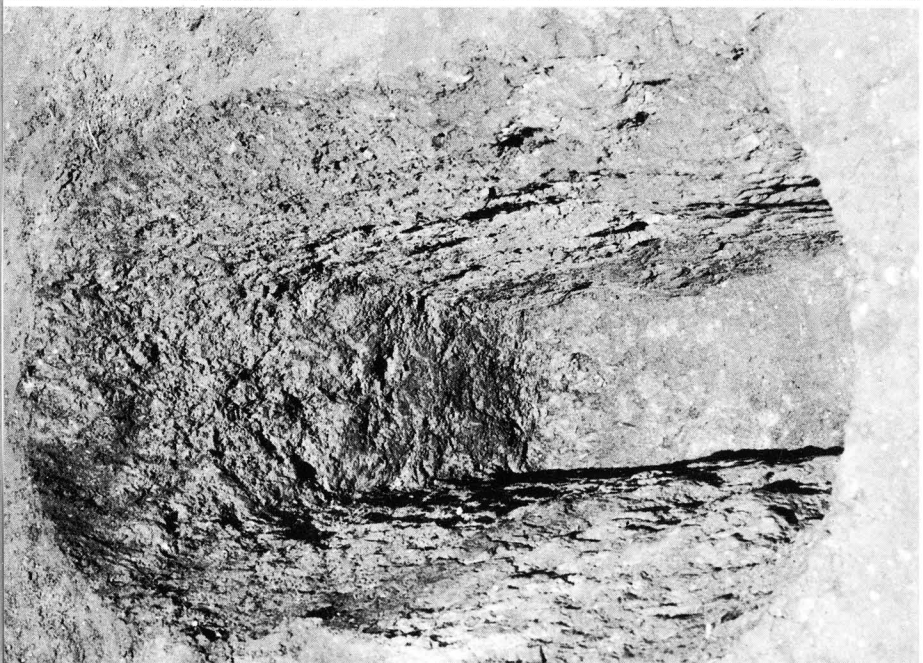
○「Ｔピット」は、沼原Ａ遺跡全体では８基を数え、昨年度調査では平坦面と北側丘陵際に形成された浅い谷部分に、今年度調査では谷部分で検出されている。当遺跡での「Ｔピット」の配置をみる限り「谷地形」を選定しているようにも考えられる。また、今年度調査では第２地点より、「Ｔピット」と同時性の可能性を持つ形態の異る土壙が３基検出され、今後、これら土壙も含めた上で「Ｔピット」の性格を考えて行く必要があると思われる。　　（佐藤甲二）



第２図　遺構配置図

1．遠　　景
（北側丘陵より）

2．2号土壙
（東より）



3．3号土壙
（南より）

沼　原　B　遺　跡

（C－245）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原30

調査期間：第1地点　昭和56年6月16日～8月19日

第2地点　昭和55年4月23日～4月26日

対象面積：第1地点　300㎡　第2地点　900㎡

発掘調査：第1地点　300㎡　第2地点　120㎡

担当職員：斎野裕彦・加藤正範

1．遺跡の立地

沼原Ｂ遺跡は、造成地のほぼ中央部南側の窪地に位置する。標高160～165ｍ、周囲の丘陵との比高は約20～40ｍである。遺跡の南東100ｍに沼原Ｃ遺跡南西400ｍに嶺山Ｂ遺跡がある。

昨年度調査ではＡ－２・３グリッドで時期不明の集石、Ｃ・Ｄ－７～９グリッドで縄文時代晩期及び弥生時代中期の遺物、それと同時期と思われるピット群が検出されている。

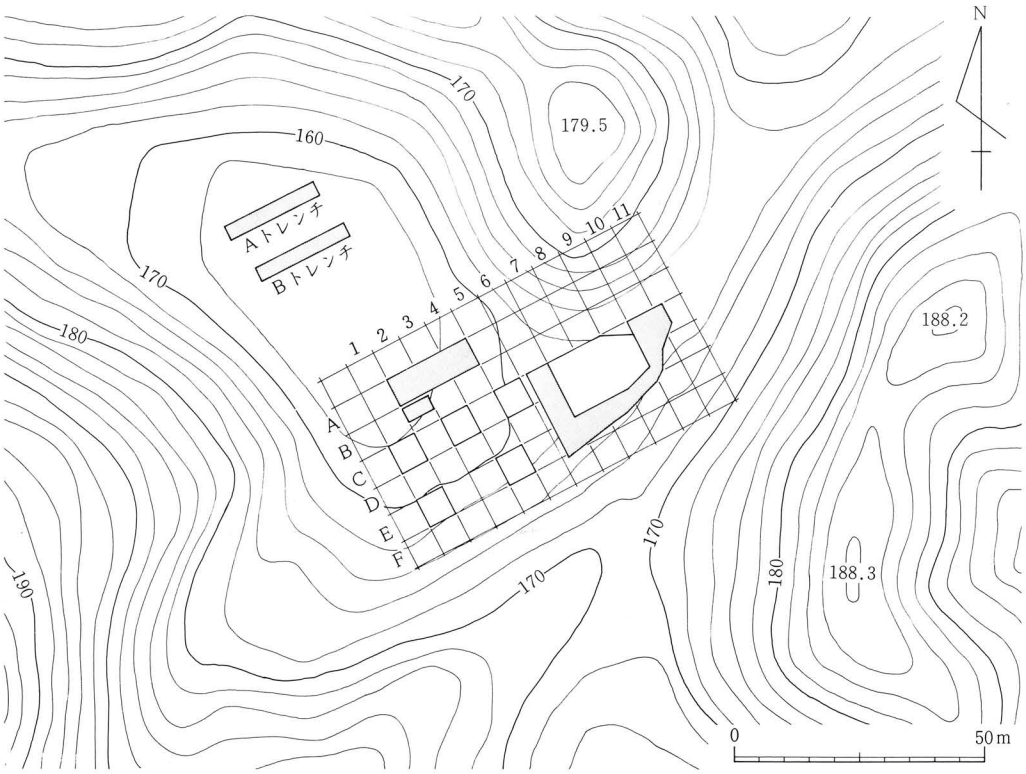
2．調査の方法

○第１地点　窪地南側の昨年度調査区の周辺を対象とし、６×６ｍのグリッド（昨年度設定）により調査を行う。

○第２地点　窪地中央部湿地帯の北側を対象とし、３×20ｍの２本のトレンチを設定し、調査を行う。

3．調査の概要

第１地点の基本層位は第Ⅰ層耕作土から第Ⅷ層地山までの８層から成り、第Ⅶ層中より主に縄文時代中期の遺物が出土した。また地山上面において土壙一基が検出された。集石下面の精査及び周辺部の調査では、遺物・遺構は検出されず、集石の時期も非常に新しいことが判明した。また集石は自然堆積の可能性も考えられる。第２地点では遺物・遺構は検出されなかった。



第１図　グリッド・トレンチ配置図

〈土壙〉 C－10グリッドの北西コーナーに位置する。184×110cmの楕円形で深さ38cm、底面は舟底状を呈す。遺物は皆無であったが、掘り込み面が第Ⅵ層中と考えられ、時期は縄文時代と思われる。

4．まとめ

第１地点ではピット群の広がりは確認されなかった。土壙とピット群との関係については本報告に委ねることにしたい。また第２地点の調査結果により、沼原Ｂ遺跡においては窪地の中でも遺物・遺構の集中する比較的標高の高い東南隅が選ばれ、何らかの生活の場としての役割を果していたであろうことが推察される。

（斎野裕彦）

1．第１地点遠景
（南東より）

2．土　　壙
（南より）

沼　原　C　遺　跡

（C－248）

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：昭和55年6月19日～9月11日

対象面積：2800㎡

発掘面積：530㎡

担当職員：加藤正範・佐藤甲二・斎野裕彦

1．遺跡の立地

沼原Ｃ遺跡は標高160～165ｍの丘陵に囲まれた谷地形に位置し、周囲の地形と比べると高低差が約25～40ｍある。遺跡の西100ｍの地点に嶺山Ａ・Ｂ遺跡があり、北100ｍの地点には沼原Ｂ遺跡がある。

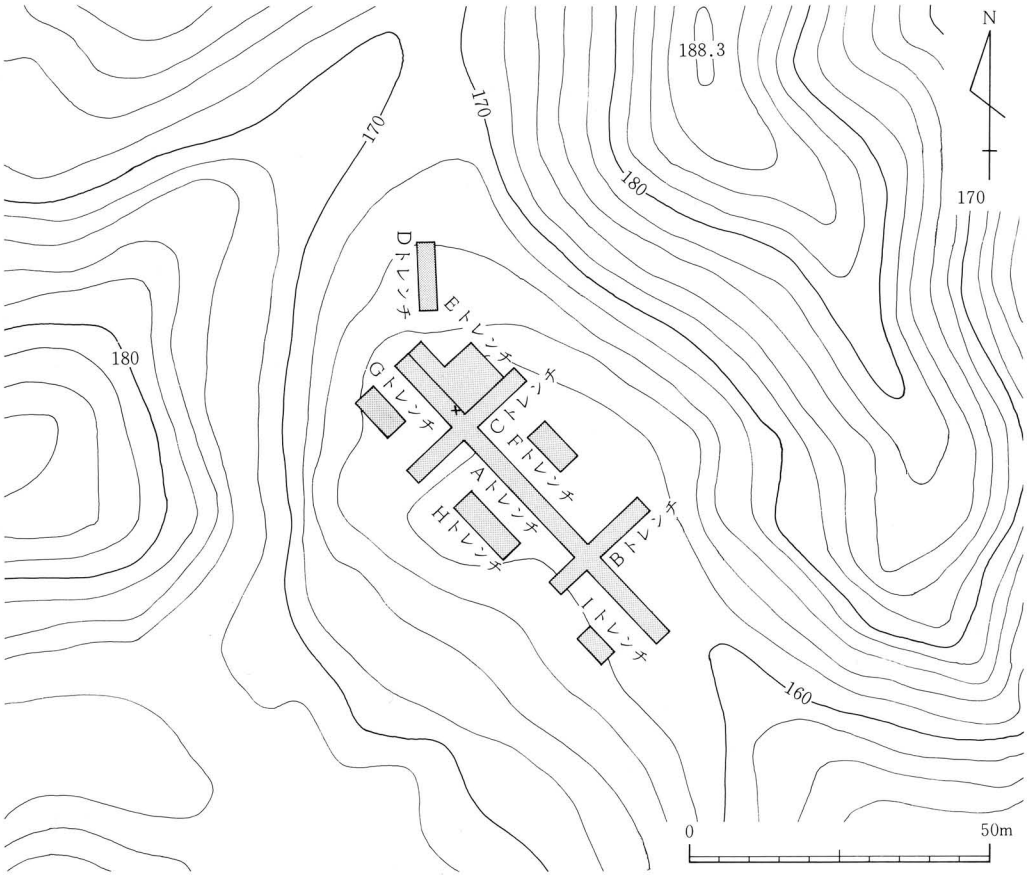
2．調査の方法

地形に沿う形でＡ～Ｄトレンチを設定し、Ａトレンチ（×印地点）より土壙を検出したためＥ～Ｉトレンチを新たに拡張した。

3．調査の概要

基本層位は第Ⅰ層耕作土から第Ⅴ層粘土質の地山までの５層から成る。Ⅳａ層より縄文時代中期の遺物を出土する。検出された遺構はＡトレンチ（×印地点）の土壙１基であり、拡張したトレンチからは遺物・遺構の検出は見られなかった。

〈土壙〉 Ⅱｂ層中より掘りこまれ、上端 80×70cm、下端60×40cm、深さ25cmを有する。底部外周には、焼土が数cmの厚さで回っており、堆積土内から多量の木炭と小動物らしい骨片が出土



第１図　トレンチ配置図

した。時期、性格は不明であり、今後検討を要する。

4．まとめ

○検出された遺構は焼土、木炭、骨片を含む時期、性格不詳の土壙１基だけであった。

○縄文時代中期の遺物が出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。当遺跡が谷地形であることを考えると、出土遺物は隣辺地域からの流れこみである可能性が強い。

○同じ様な谷地形の嶺山Ａ遺跡では「Ｔピット」が８基検出されているにもかかわらず、当遺跡では全く検出されなかった。このことは「Ｔピット」の配置を考えていく上で大切な要素となるであろう。

（加藤正範）

1．トレンチ全景
（北西より）

2．土　　壙
（南西より）

嶺山A遺跡

（C－246）

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山19

調査期間：昭和55年9月1日～11月6日

対象面積：2300㎡

発掘面積：1920㎡

担当職員：斎野裕彦・佐藤甲二・加藤正範

1．遺跡の立地

嶺山Ａ遺跡（昨年度の嶺山遺跡西区）は沼原Ａ遺跡の北西450m、沼原Ｂ遺跡の南150mに位置し、丘陵に三方を囲まれた北東へ開く幅25m長さ90mの谷地形を呈している。標高は165～172m、周囲の丘陵との比高は10～20mである。昨年度の試掘調査では縄文時代の遺物及び土壙のプランが確認されている。尚、北側丘陵中段には嶺山Ｂ遺跡がある。

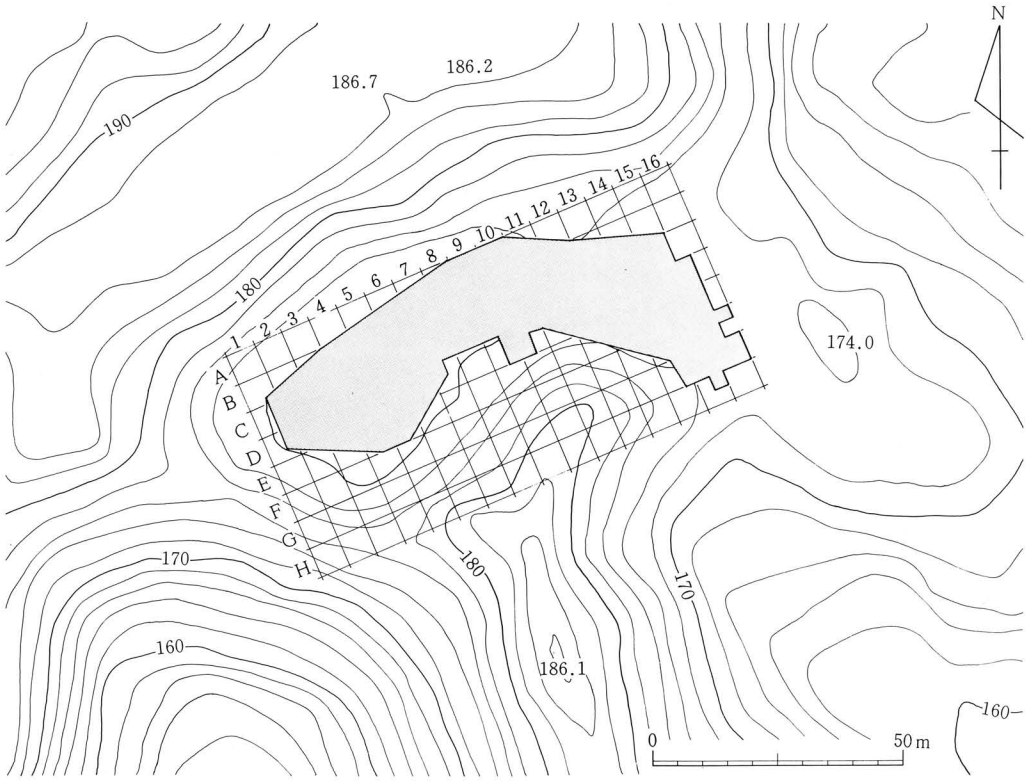
2．調査の方法

昨年度の試掘に際して設定された６×６ｍのグリッドにより調査を行う。(谷に沿うラインを横軸：１～16．直交するラインを縦軸：Ａ～Ｈとした)

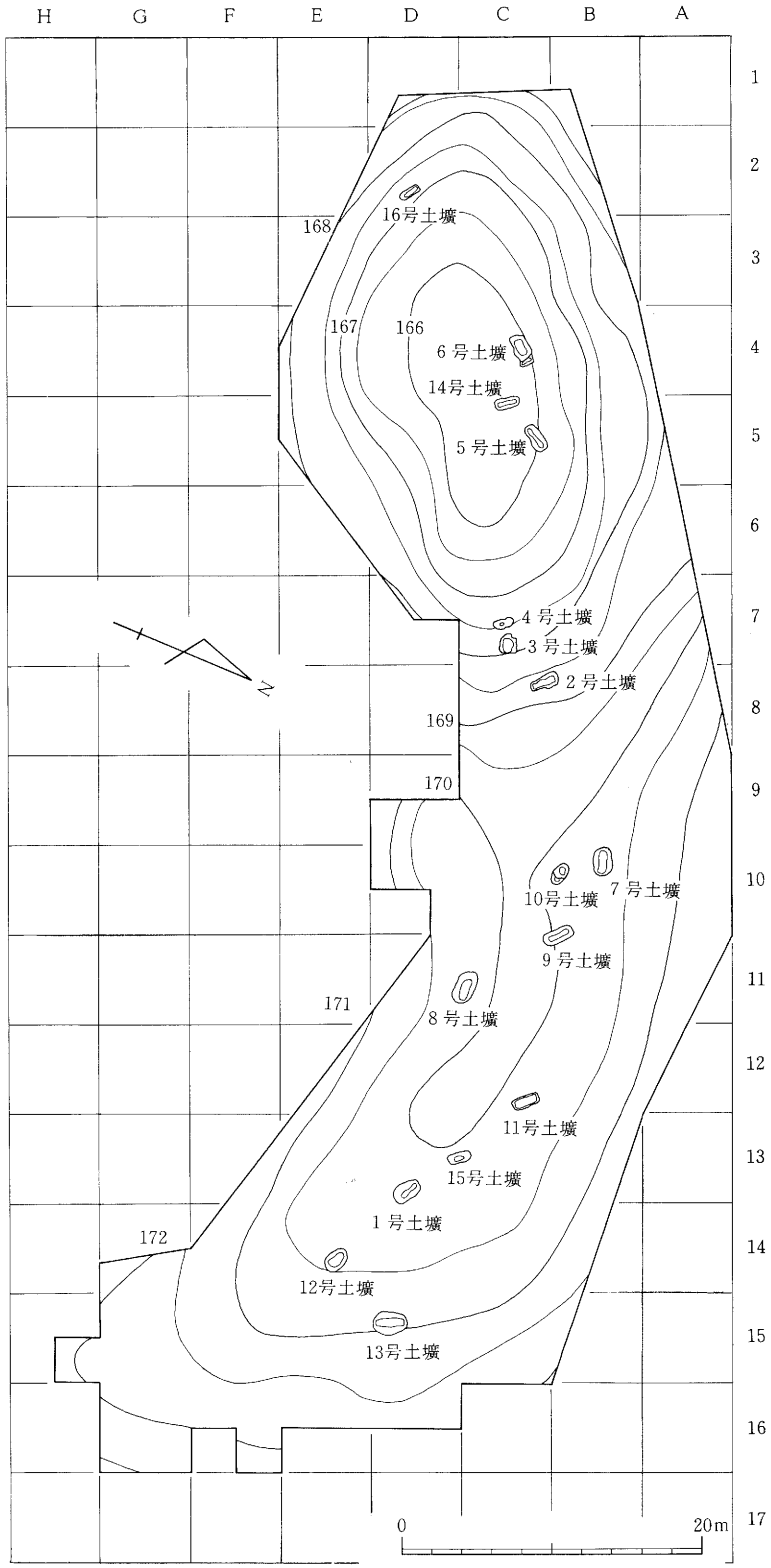
3．調査の概要

基本層位は第Ⅰ層耕作土から第Ⅷ層地山までの８層から成る。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは無遺物層で、第Ⅴ層から平安時代の遺物が，第Ⅵ層・第Ⅶ層からは縄文時代の遺物が出土した。第Ⅴ層と第Ⅵ層との間には所々灰白色の火山灰層が入る。第Ⅶ層の出土遺物は縄文時代後期及び晩期に所属する。

遺構は地山上面において16基の土壙が検出された。配置は第２図に示す通りである。16基中８基が「Ｔピット」である。(１・５・７・８・９・13・14・16号土壙）礫層を掘り抜いている



第１図　グリッド配置図



第２図　遺構配置図（等高線は地山面）

ものには、底面及び壁面に凹凸の見られることもある。規模は大きいもので上端234×160cm、小さいもので158×58cm、深さは98～178cmである。また上端平面形及び規模は「Ｔピット」に類似するが、深さ30～40cmの浅い土壙が６基検出されている。(２・６・10・11・12・15号土壙)底面は舟底形のものと凹凸のものがあり、堆積土に焼土の入るものもある。他の２基、３号・４号土壙は上端平面形が円形及び楕円形で斜めに掘り込まれ、底面に移行するに従い壙径が小さくなる。３号土壙は上端134×102cm、深さ132cm、４号土壙は上端134×64cm深さ52cmである。

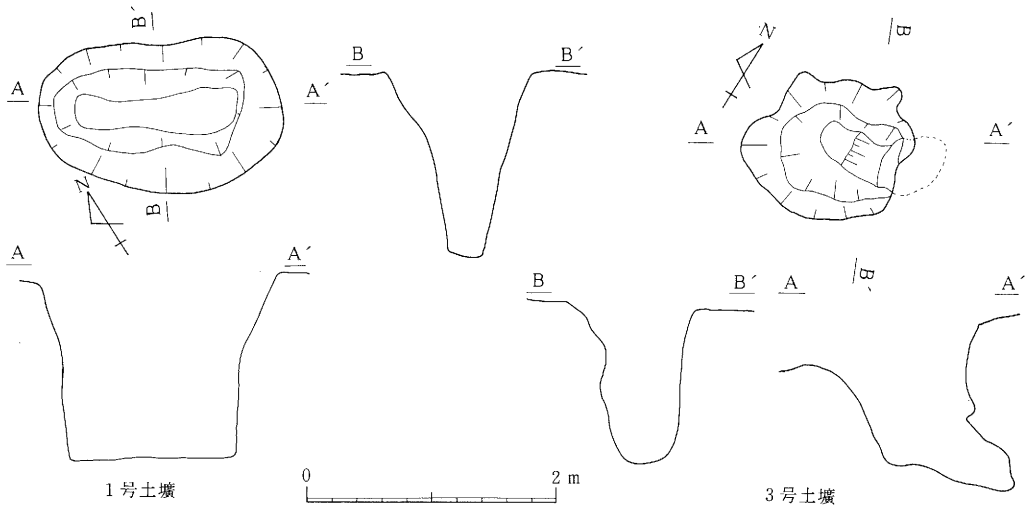
４．まとめ

○嶺山Ａ遺跡はＣ－４グリッド周辺が最も低く、東から西への傾斜をもつ。検出された16基の土壙の多くは谷中央の平坦面から緩斜面に配されている。

○土壙の時期は堆積土からの遺物の出土が皆無に等しく明確でないが、土壙内に第Ⅶ層が堆積しているものがほとんどであり、縄文時代晩期以前と考えられる。土壙には形態差が認められ、沼原Ａ遺跡第１地点、第２地点で検出された11基の土壙の中にも同様の形態差が見られることから、同一時期にこれらの土壙が存在した可能性がある。土壙はすべて自然堆積により埋まっている。

○「Ｔピット」には堆積土最下層が地山崩壊土のものと第Ⅶ層のものがあり、両者の上端平面形に相違が見られる。これは嶺山Ａ遺跡において得られた新知見である。

○嶺山Ａ遺跡は谷地形ということもあり、人間の居住の場とは考えにくく、今後土壙の性格の解明が遺跡の性格を知る上で大きなポイントとなるであろう。　　（斎野裕彦）



第３図　土壙実測図

1．全　　景
（南より）

2．全　　景
（北より）

3．８号土壙
（北より）

4．2号土壙
（南西より）

5．12号土壙
（北東より）

6．3号土壙
（南西より）

嶺山B遺跡

(C−293)

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山26

調査期間：昭和55年7月26日～9月1日

対象面積：2000㎡

発掘面積：560㎡

担当職員：佐藤甲二・斎野裕彦・加藤正範

1．遺跡の立地

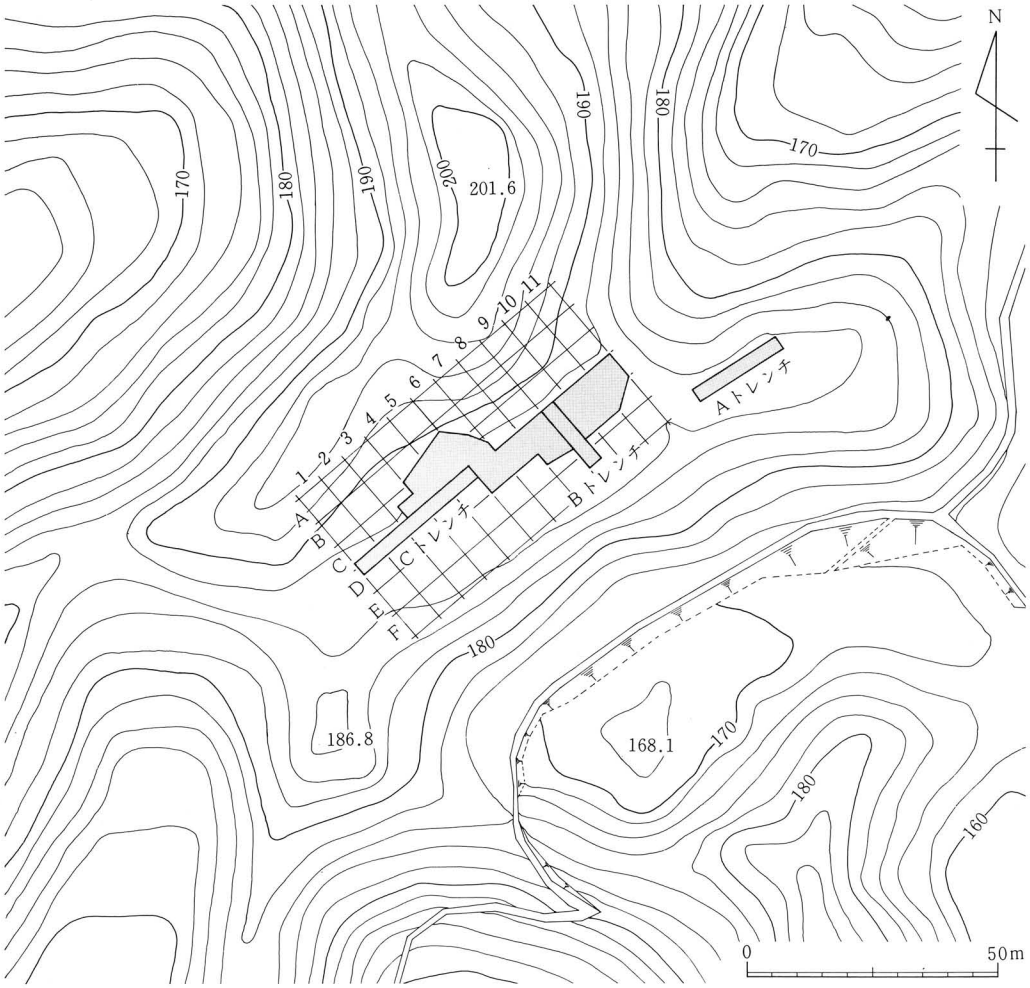
嶺山Ｂ遺跡は丘陵北東側斜面の標高186～189ｍの間に形成された、幅約20ｍ程の細長い平坦面（約2,000㎡）上に位置する。北東、南東、南西の三方向は谷、窪地に至る急斜面となる。当平坦面は以前開墾を受けており、また調査前まで道路部分になっていた場所である。南東の谷には嶺山Ａ遺跡が、北東の窪地には沼原Ｂ遺跡が位置する。

2．調査の方法

幅３ｍの試掘トレンチＡ～Ｃ（長さ12・９・30ｍ）の調査結果より、縦軸Ａ～Ｆ、横軸１～11とする６×６ｍグリッドによる調査に変更し、拡張調査を行う。

3．調査の概要

Ａ・Ｃトレンチとも遺物、遺構は検出されず、表土（約５～20㎝）下がすぐ地山面となる状態であった。Ｂトレンチでは第Ⅰ層表土から第Ⅵ層地山までの６層が確認され、第Ⅴ層中より



第１図　グリッド・トレンチ配置図

縄文土器片が若干出土し、土壙1基が検出された。この為、第V層堆積部分（ほぼ第2図破線内）を調査の主体としたが、第V層中よりわずかに縄文時代中期～晩期の遺物が出土したのみであった。

〈土壙〉上端約250×120cm、下端約150×70cm、深さ約120cmの規標を呈する「Tピット」で、出土遺物は皆無であった。土壙は第V層中より掘り込まれており、縄文時代晩期以前の時期に所属するかと思われる。

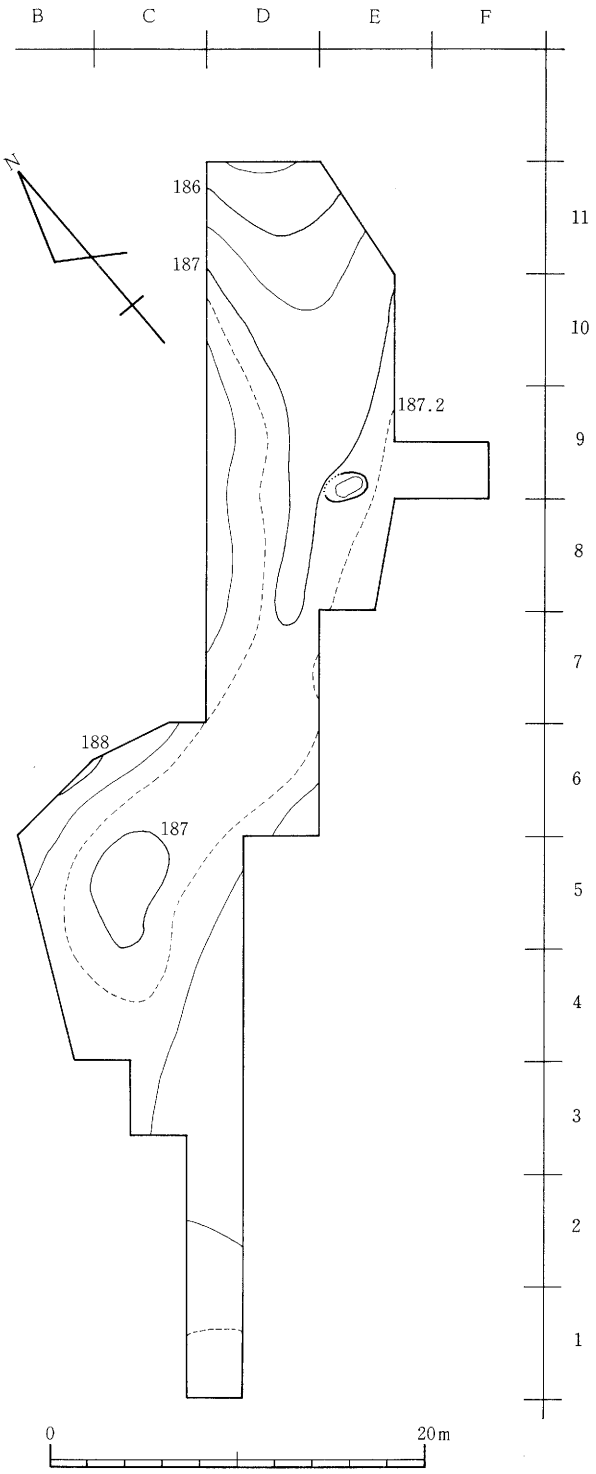
4．まとめ

○調査の結果、この平坦面は以前にかなりの削平、攪乱を受けており、旧地形は現地形より平担部分がかなり狭かったのではないかと思われる。

○平担部奥の丘陵際との間に走る浅い谷状の部分より、縄文時代中期から晩期にわたる遺物包含層と、縄文時代晩期以前と考えられる「Tピット」1基が検出された。

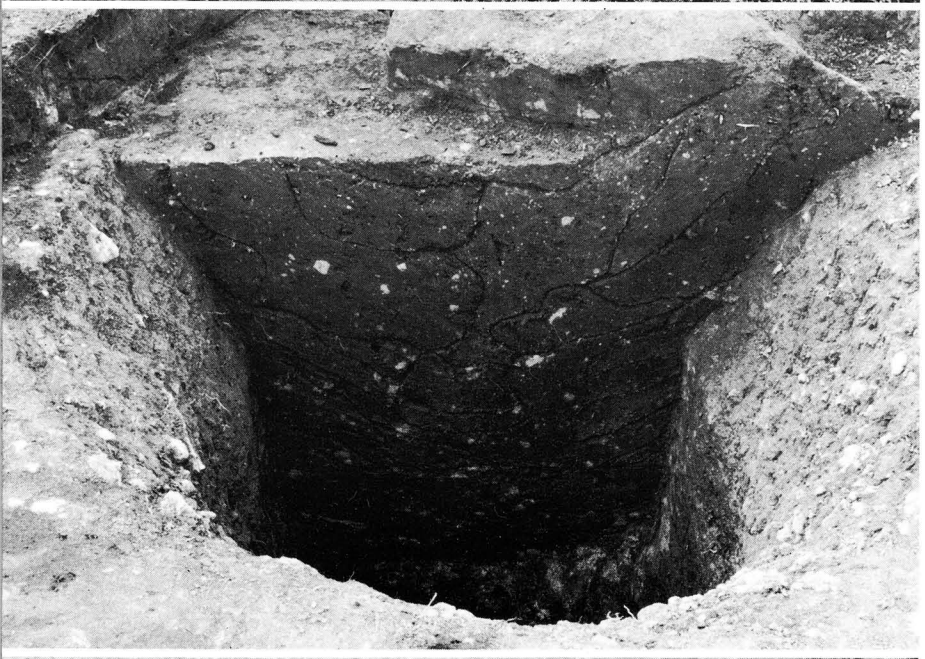
○「Tピット」が1基しか検出されなかったこと、そして沼原A遺跡第1地点出土の「Tピット」6基とほぼ同様な地形から検出されたことは、この種の土壙の性格を考える上で、貴重な資料の追加といえる。

（佐藤甲二）

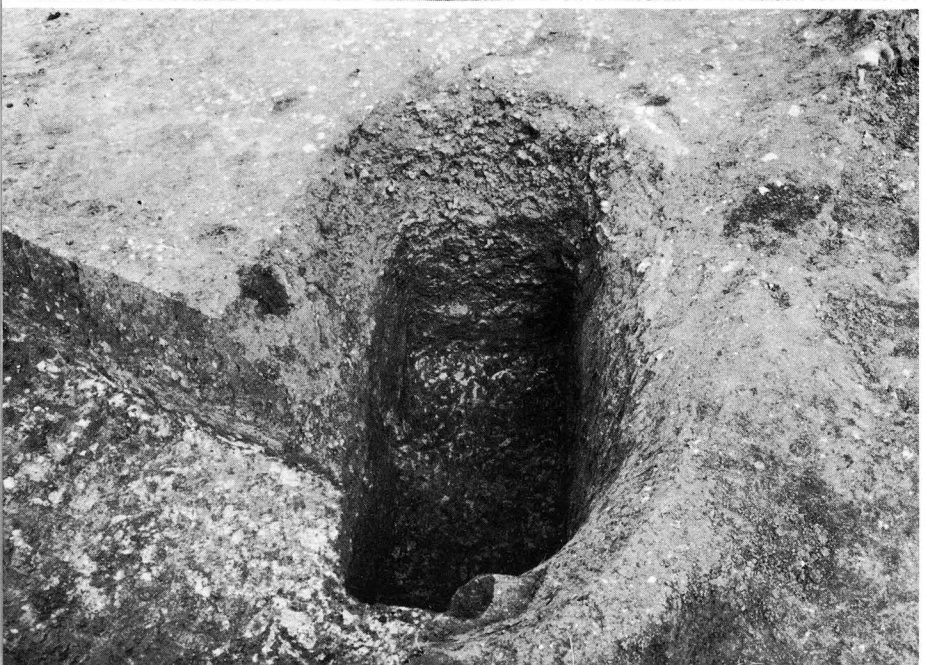


第2図　遺構配置図（等高線は地山面）

1．全　　景
（南東より）
下は嶺山Ａ遺跡



2．土壙セクション
（南東より）



3．土　　壙
（北西より）

嶺山C遺跡

（C－249）

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山15、16、20

調査期間：第1地点　昭和55年4月14日～4月22日

第2地点　昭和55年9月16日～11月28日

第3地点　昭和55年4月29日～5月1日

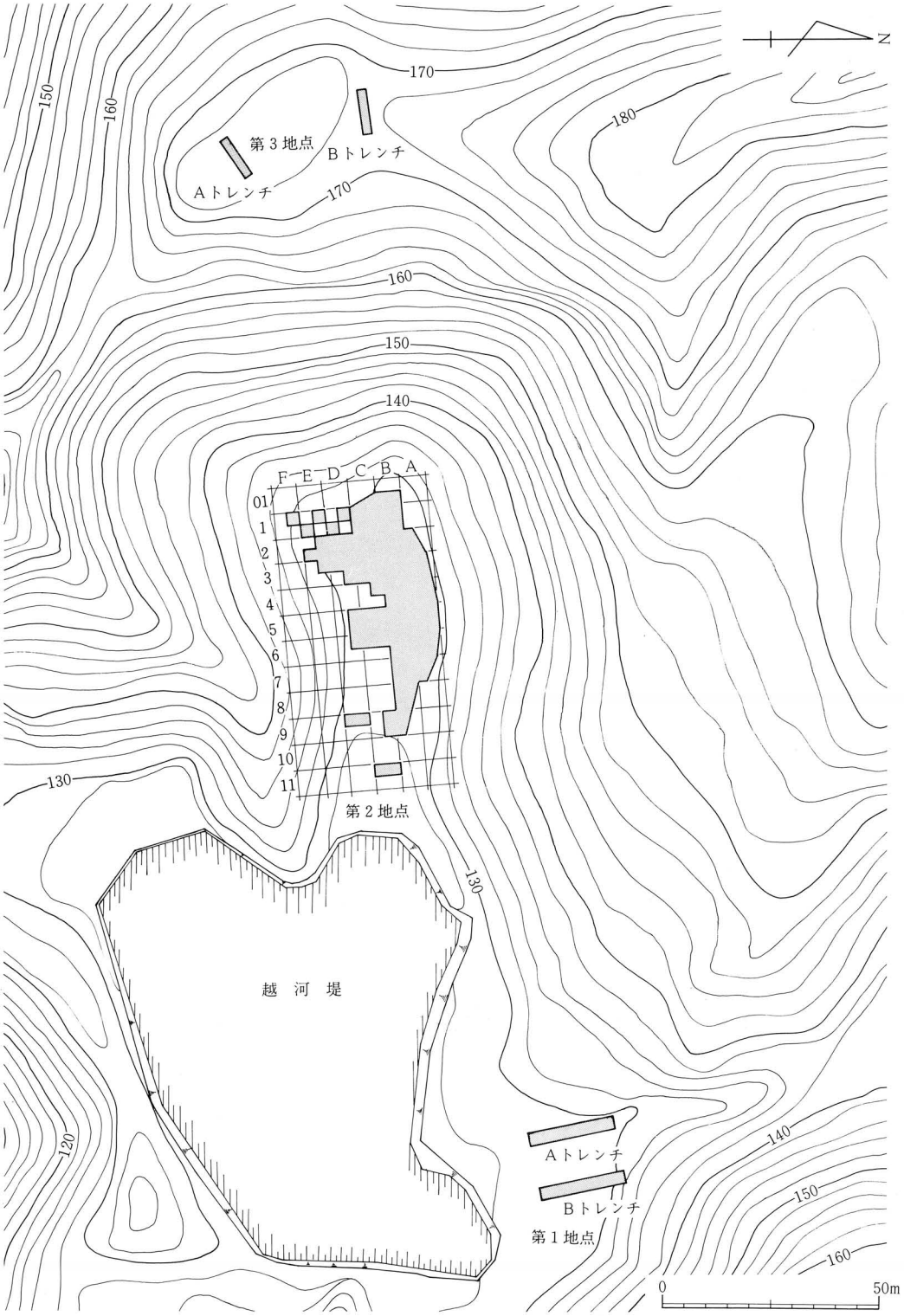
対象面積：第1地点　1200㎡　第2地点　1400㎡

第3地点　800㎡

発掘面積：第1地点　120㎡　第2地点　900㎡

第3地点　40㎡

担当職員：佐藤甲二・加藤正範・斎野裕彦



第１図　グリッド・トレンチ配置図

1．遺跡の立地

造成地内ほぼ南端に位置する越河堤は、東へのびる深い沢の上流部を堰止め作られた、人工の農業用貯水池である。この沢を除く三方は丘陵に囲まれている。堤北岸には、標高128～130mの間に形成された、緩やかに南へ傾斜する平坦面（第１地点）が、西岸には、標高130m前後の東西に細長い、約1,600㎡の谷（第２地点）がある。この谷の西方は、標高差約40mの丘陵となり、項部上には若干の平坦面（第３地点）が見られる。堤南東には、北側を自然の沢で利用した峯館が、沢の下流約150mの北側丘陵中段平坦面には、沼原Ａ遺跡が位置する。

2．調査の方法

○第１地点　ほぼ南北方向に２本の３×20mトレンチ（Ａ・Ｂ）を設定し、調査を行う。

○第２地点　南北軸をＡ～Ｆ、東西軸を１～11とする６×６ｍグリッドによる調査を行う。

○第３地点　ほぼ東西方向に２本の２×10mトレンチ（Ａ・Ｂ）を設定し、調査を行う。

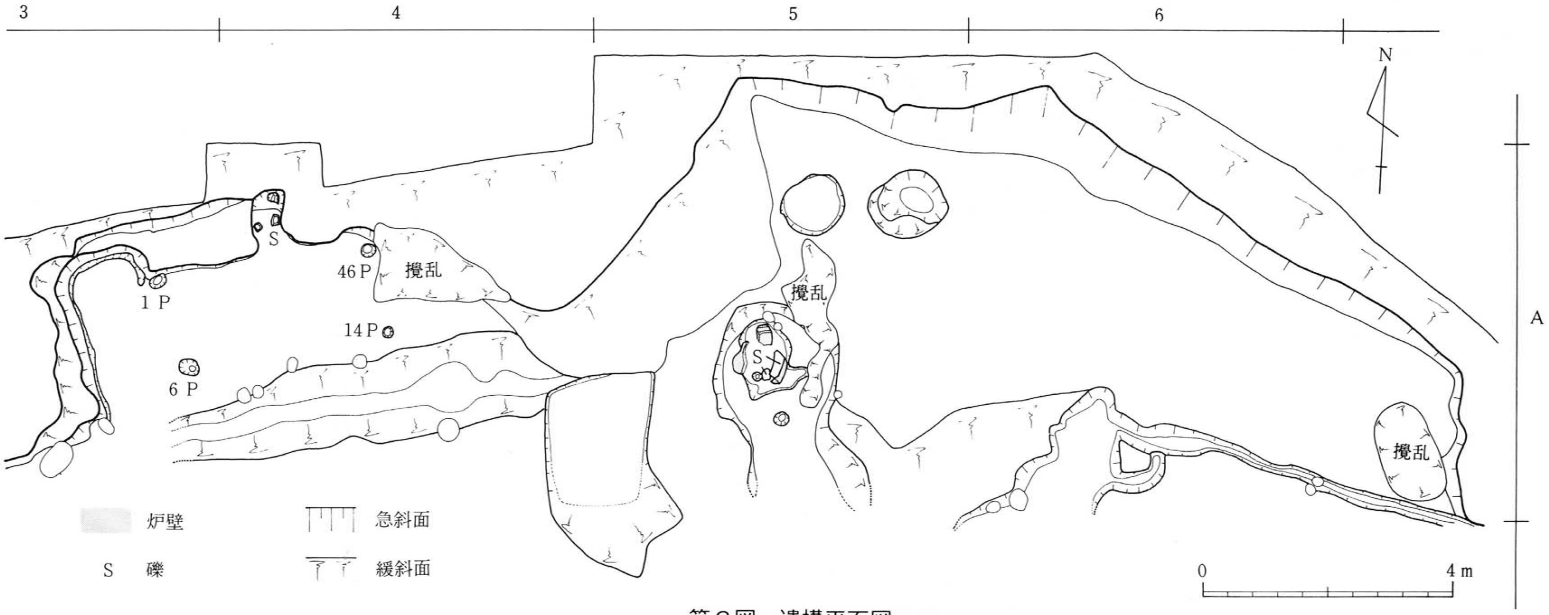
3．調査の概要

第１・３地点とも何ら遺物、遺構を検出することはできなかった。第１地点では、耕作土下から地山上までの間、砂層が何重にも堆積し、この地区が以前まで水の流路であった様相を示す。第３地点では、数cmの表土下が地山となり、地山上にほとんど堆積土がみられない状態であった。第２地点に於いては、基本層位が第Ⅰ層耕土から第Ⅶ層地山までの７層から成る。第Ⅳ層中には、多くの平安時代の遺物が含まれ、Ａ－３～６グリッドより製鉄関係の遺構が検出された。第Ⅵ層中よりは、若干の縄文時代の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。

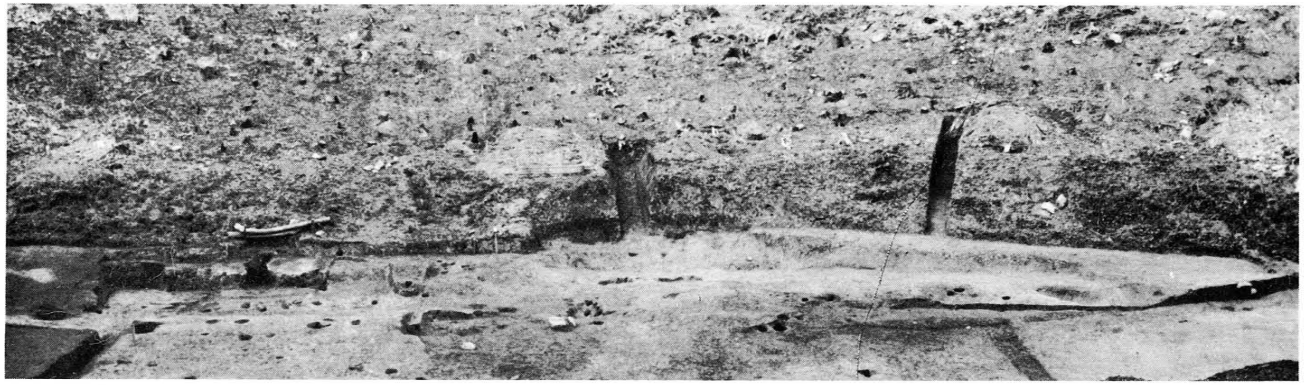
〈製鉄関係遺構〉谷北側の丘陵際緩斜面上に、幅約３～５ｍ、長さ約27ｍの東西に細長い平場が造り出され、中央部で地山の張り出し部がみられるため、平場は東西に二分されているようにもみえる。平場の東側、西側の南端には、小規模な溝が東西に走っている。平場内には、炉１基、カマド１基、小土壙２基、ピット多数が検出され、西端の浅い周溝らしきものの内よりは多量の木炭、炉の東側・西側（Ａ－５グリッド南東・南西コーナー付近）よりは多量の焼土が出土した。炉東側焼土内より炉壁片が、また炉南側Ｂ－５・６グリッドを中心として多量の鉄滓と共に数点の羽口片が出土している。

○炉：平場中央部より多量の焼土と共に検出された。炉上部はほとんど損われた状態で、炉壁の最下部と炉床の一部、そして炉壁の強化あるいは羽口の支えとも考えられる角礫・円礫が数個検出された。炉壁は残りの良い場所で高さ14cm、厚さ18cm（炉床と接する部分）を測る。炉はその残存形態より推測するに、径40～60cmの円形あるいは楕円形を呈するものかと思われる。

○カマド：平場東側の北壁に位置する。北壁をくり抜き構築されており、奥壁上部には煙出部が、内部より支脚用の角礫が直立した状態で検出された。焚き口を中心として、数cmの厚さに



第２図　遺構平面図



1.　平場全景（南より）

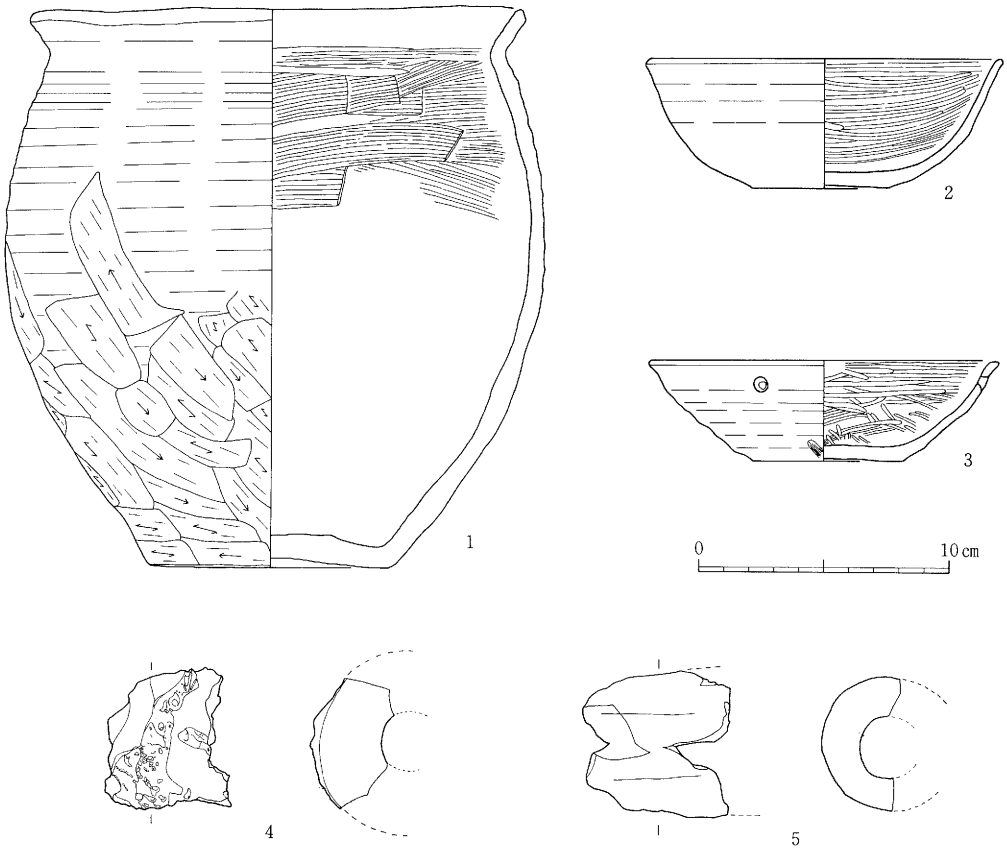
堆積した焼土と共に、数個体分の土師器片が出土した。カマド南側には、深さが約50cm前後の特に深いピット（１号・６号・14号・46号）が、ほぼ長方形状に並んでいる。

４．まとめ

○第１・３地点では何ら遺物・遺構は検出されず、土層堆積状況をみる限り、両地点には遺跡の可能性は望めないといえる。

○第２地点の出土遺物（鉄滓・羽口片・炉壁片・木炭）、炉と多量の焼土の検出により、谷の北側に造り出された平場と、その内側より検出された各種の遺構は、製鉄に関連するものと思われ、炉上部及びカマド内出土の土師器の年代より、当遺跡は平安時代の製鉄跡であると考えられる。ただし、調査区内より炭窯の検出はみられなかったが、この谷の隣辺地域に炭窯が作られた可能性は強い。

（佐藤甲二）



１．土師器甕（カマド内出土）　２．土師器坏（Ａ－３グリッド平場内出土）　３．土師器坏（炉内出土）
４．羽口片（Ｂ－６グリッド出土、先端部鉄滓付着）　５．羽口片（Ｂ－６グリッド出土）

第３図　遺物実測図

2．第２地点遠景
（東より）

3．炉
（西より）

4．カ　マ　ド
（南より）

梨　野　A　遺　跡

（C－180）

遺跡所在地：仙台市茂庭字大堤22

調査期間：昭和55年4月7日～8月8日

対象面積：2400㎡

発掘面積：970㎡

担当職員：篠原信彦・佐藤甲二・加藤正範・斎野裕彦

大堤川
N
180
180
団地内環状線
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17
190
190
190
200
180
170
県道菅生－折立線
0
50m

第1図　グリッド配置図

1．遺跡の立地

梨野Ａ遺跡は造成地内の北東隅、県道菅生・折立線が梨野東地区で大きく東へ屈曲した地点より西側に約100ｍの付近にあたる。遺跡は丘陵より北側に張り出した緩かな舌状平坦上に位置している。標高は180～190ｍである。

昨年度は西側斜面の調査を行い、表土直下ですぐ地山となり、磨滅した土器片が少量出土した以外は何の遺構も検出されなかった。東側斜面及び平坦面上には以前から土器片、石器が多く採集されており、何らかの遺構が存在するものと考えられていた。

2．調査の方法

本年度の調査は昨年度調査区の東側に接する緩い東側斜面で、造成工事に伴う部分を調査対象とした。調査区は昨年度のグリッド配置をそのまま使用し、6×6ｍのグリッドを南北軸（Ａ～Ｒ）、東西軸（１～17）として調査を行った。

3．調査の概要

調査区内における基本層位は第Ⅰ層（表土）から第Ⅳ層（地山）の４層から成る。第Ⅱ・Ⅲ層は遺物包含層で、第Ⅱ層より縄文時代中期・後期、第Ⅲ層より縄文時代早期・前期の遺物が出土する。遺物は平箱にして約100箱程度出土し、土師器甕１個体以外は全て縄文時代の遺物である。特に第Ⅱ層中より多くの遺物が出土した。縄文時代の遺物は土器片が圧倒的に多く、次は石器である。検出遺構は土壙約30基、ピット約120基、剝片集中部分１箇所、性格不明の溝状遺構１条がある。

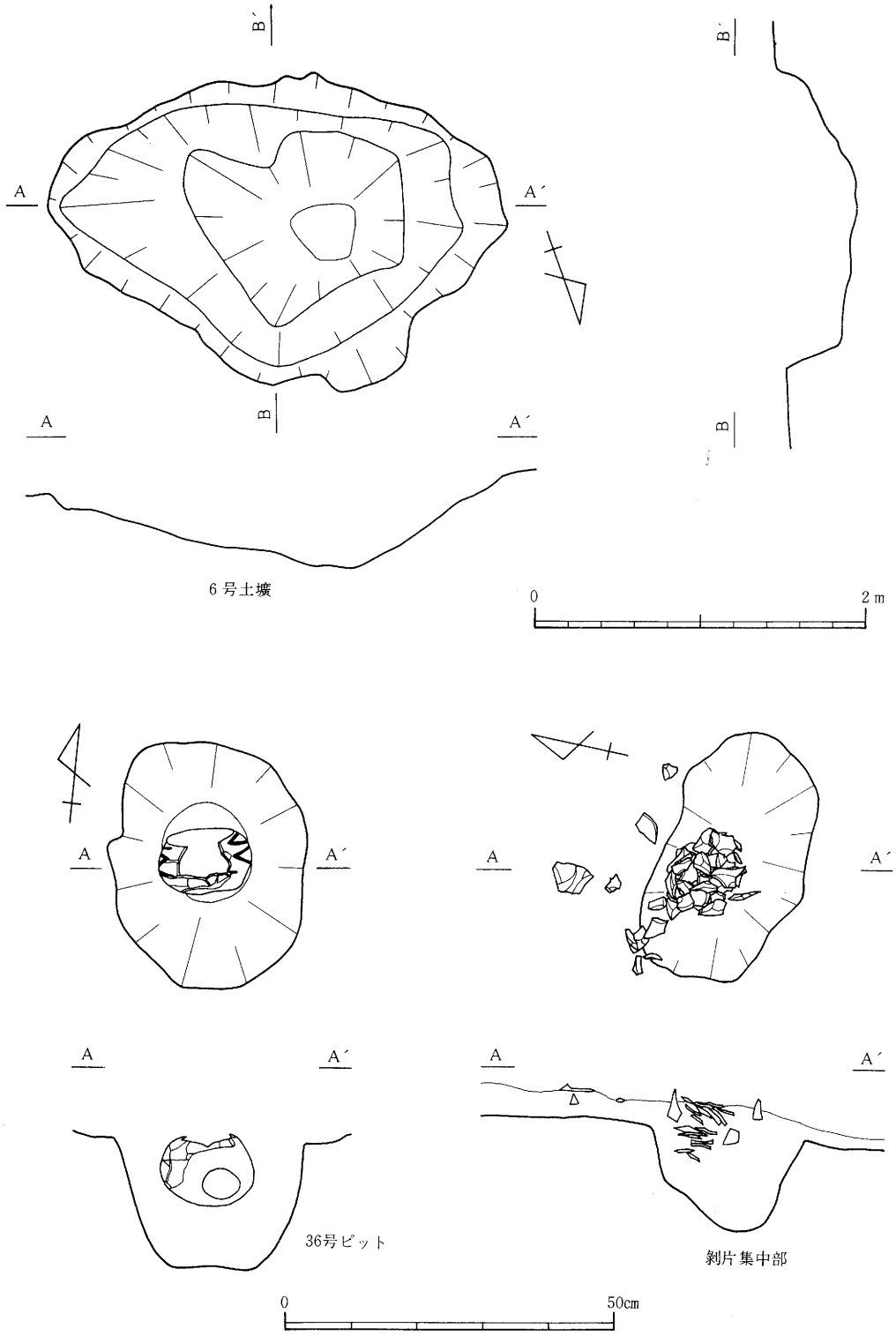
〈土壙〉調査区内より約30基の土壙が検出された。大きく見て土壙は２つの地区に集中して検出された。１つはＪ・Ｋ－７・８グリッドであり、他はＭ・Ｎ－６・７グリッドである。いずれも土壙・ピットなどと重複しているものがほとんどである。

これらの土壙は平面形がほとんど楕円形、長楕円形を呈し、断面形はＵ字形を呈するものが多い。土壙はその規模によって一応大形、中形、小形の３つに分けられる。なお、形状によっても細分は可能である。

○大形の土壙：これに属するものは大きさが３ｍを超えるもので、約５基が検出されている。１基を除いてＪ・Ｋ－７・８グリッドに位置している。平面形は楕円形、長楕円形、円形のものがあり、深さは20～60cmを超えるものまであり、一様ではない。この中で規模が最大なもの（２号）は長軸396cm、短軸234cmを測る長楕円形を呈し、深さは60cmを測る。

○中形の土壙：これに属するものは大きさが２～３ｍ以下のもので、約６基が検出されている。平面形は楕円形、断面形はＵ字形を呈するものが多い。深さは20～60cmを測るものまであり、一様ではない。

６号土壙はこれに属し、Ｊ－７・８グリッドで検出された。平面形は楕円形状を呈し、長軸



第２図　遺構実測図

280cm、短軸190cmを測る。断面形はU字形あるいは摺鉢状を呈し、深さ54cmを測る。壁の立ち上がりは緩い傾斜をもつ。

○小形の土壙：これに属するものは大きさが１～２ｍ以下のものであり、約10数基が検出されている。これらの土壙の多くはＭ・Ｎ－６・７グリッドに検出されている。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈するものが多く、深さは10～50cmを測るものである。

〈ピット〉調査区内より約120基のピットが検出されたが、大きさ１ｍ以下のものをピットとして調査したために土壙に分類されるものも含んでいる。平面形は円形、楕円形を呈し、大きさも20～60cmのものまである。

36号ピットはＫ－８グリッド北西隅に検出され、平面形は楕円形で長軸37cm、短軸30cmを測る。断面形はU字形で深さ20cmを測る。遺物は縄文土器・鉢１個体がピット上面に横倒した状態で出土しただけである。

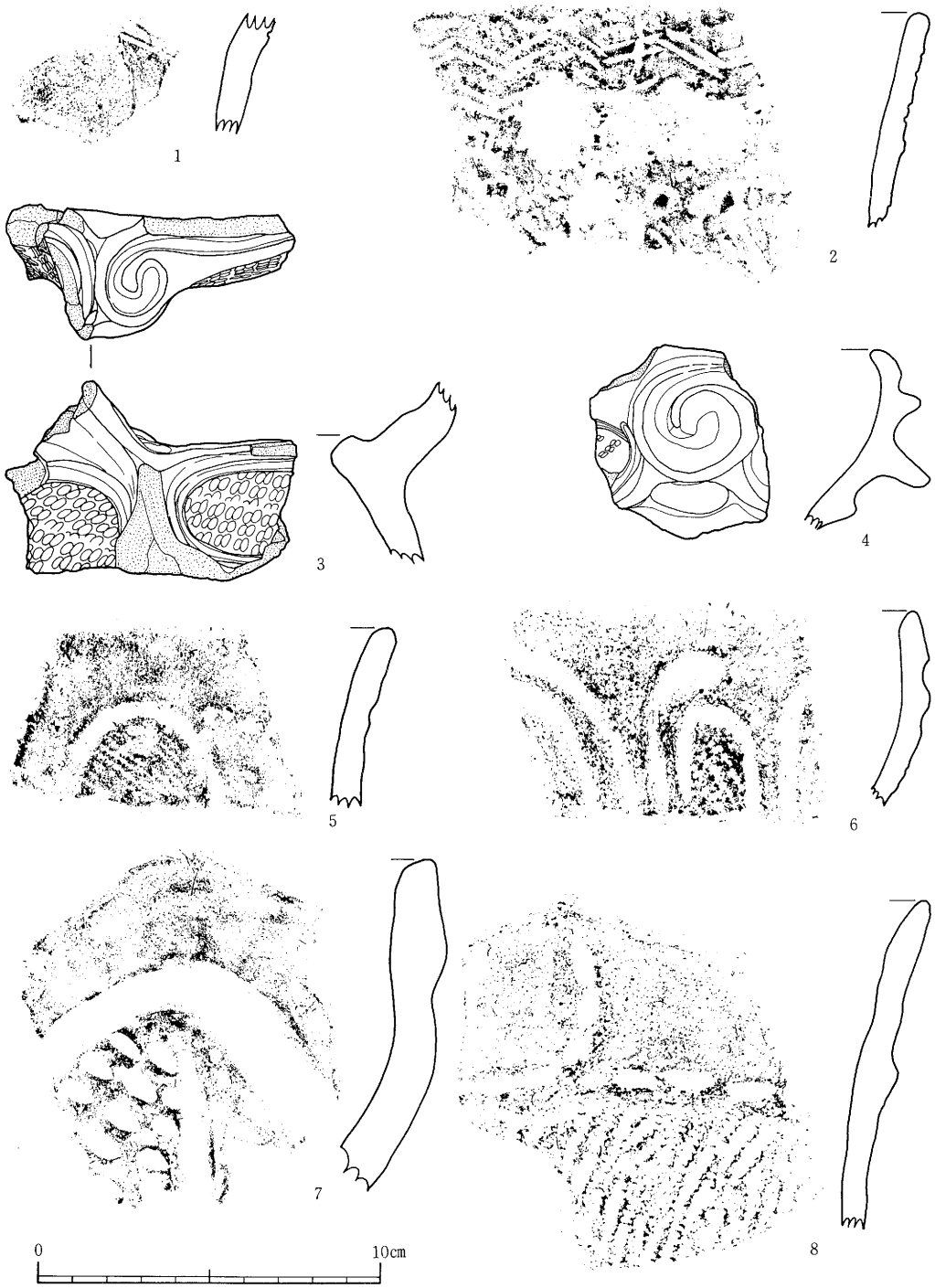
〈剥片集中部分〉Ｋ－16グリッド北東隅より検出された。約100点程の石匙等の剥片石器と剥片が、径15cmの範囲に集中し、かつ重なった状態で出土した。検出面では木炭粒のひろがりがみられただけで、これに伴う明瞭な遺構のプランは検出されなかった。約５cm下げた段階では長軸約40cm・短軸約10cmの楕円形状を呈する落ち込みがみられたが、この落ち込み自体形状がしっかりしておらず、明確に剥片・剥片石器に付随する落ち込みとは断定出来ない。

４．まとめ

○調査区内より縄文中期・後期を主体とする多量の遺物とともに多数の土壙、ピットが検出された。土壙はその規模より大形、中形、小形の３つに分けられる。これらの土壙は造成地内の沼原Ａ遺跡、嶺山Ａ・Ｂ遺跡で検出されている「Ｔピット」とは形態、規模、性格において異なった様相を呈している。また１箇所に約100点ほどの剥片及び剥片石器が集中して出土したことは特記される。

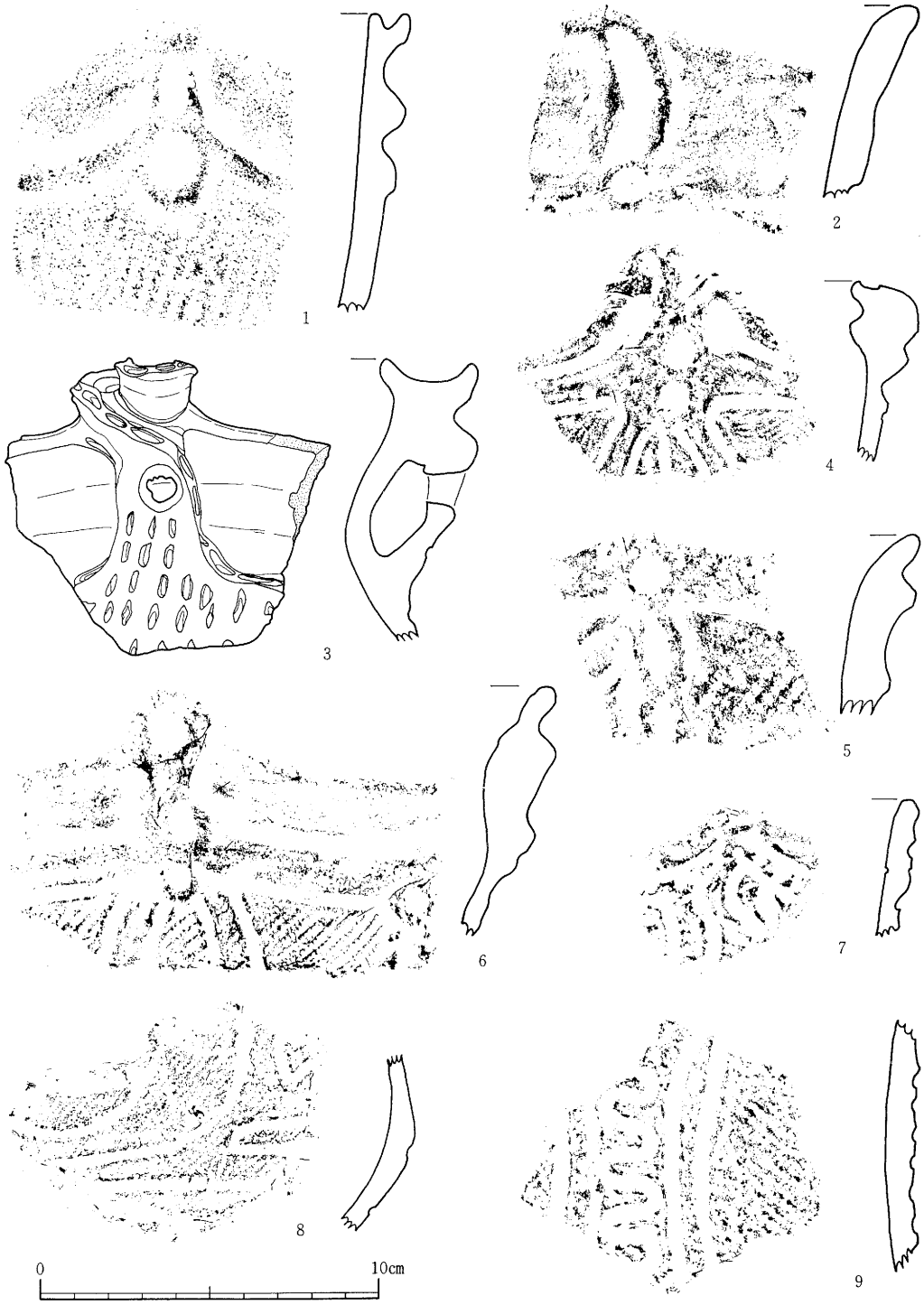
○以前の表面採集(註２・５)では得られなかった縄文時代早期及び古墳時代中期の遺物が、今回の調査によって新に出土した。

○調査区内より住居跡は検出されなかったが、この平坦面東側部分の一段下がった面に住居跡群が存在する可能性もある。　（篠原信彦）



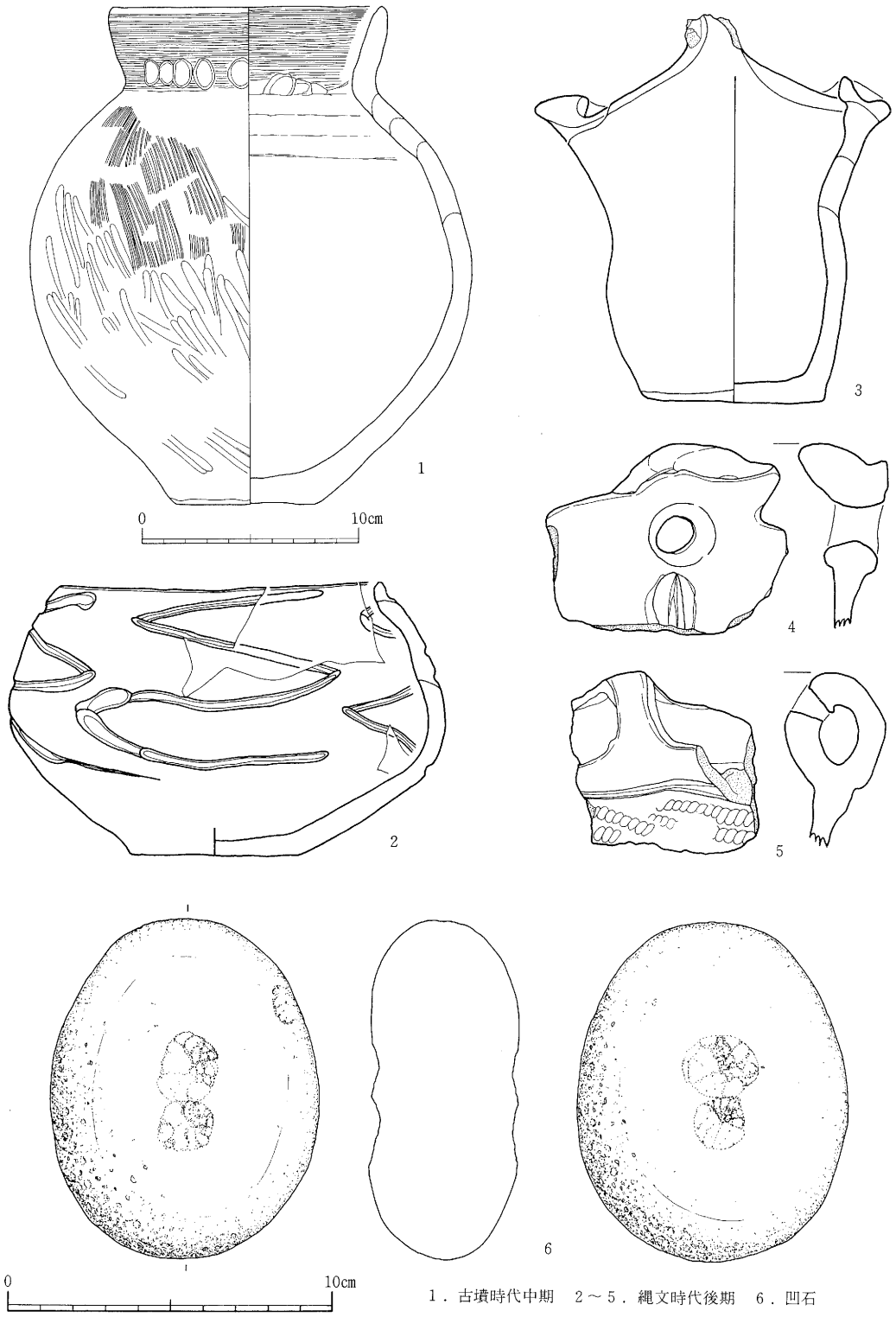
1．縄文時代早期　2．縄文時代前期　3～8．縄文時代中期

第3図　遺物拓影



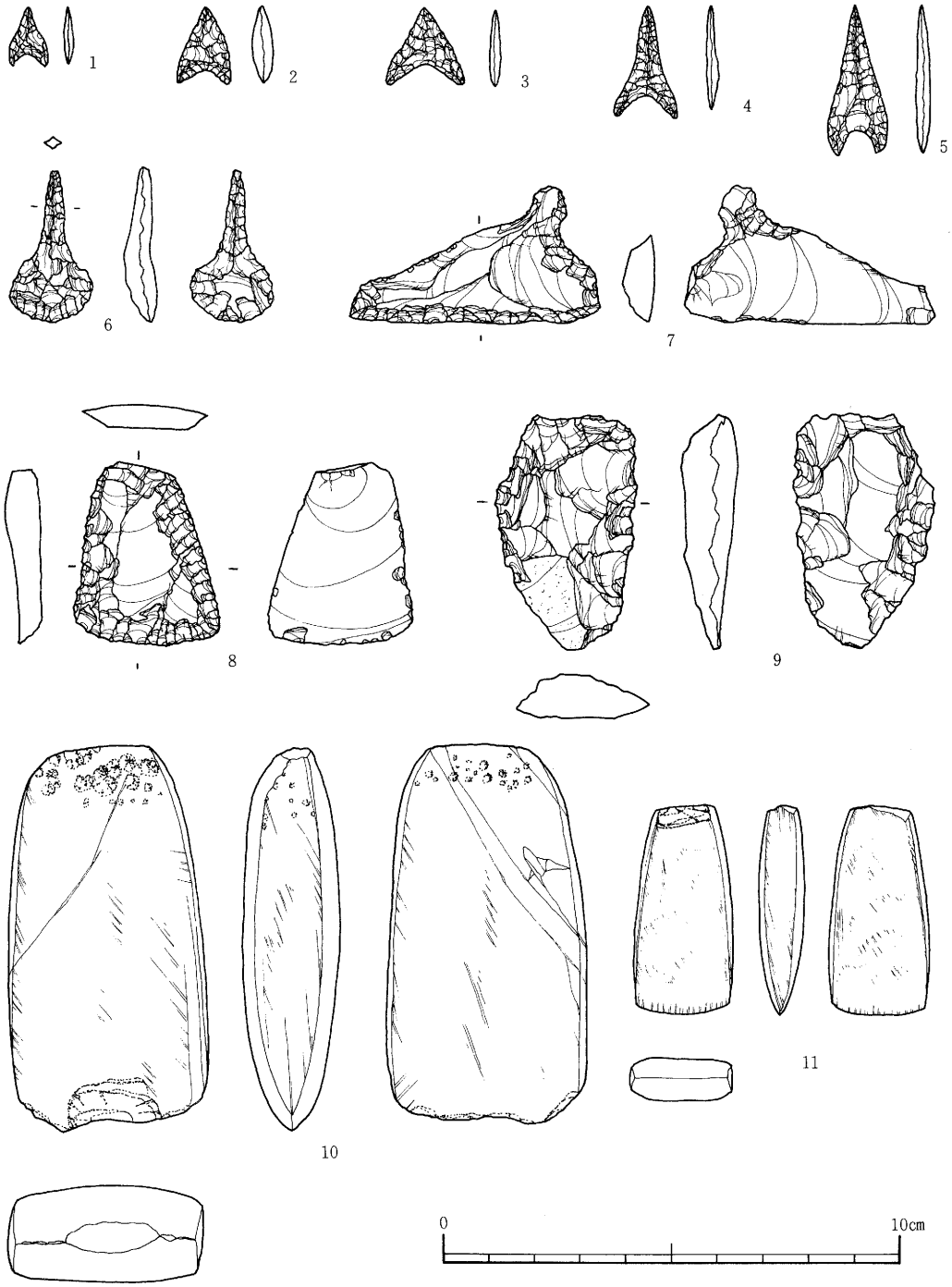
1～9．縄文時代後期

第４図　遺物拓影



1．古墳時代中期　2～5．縄文時代後期　6．凹石

第5図　遺物実測図



1～5．　石鏃　　6．石錐　　7．石匙　　8．スクレイパー
9．篦状石器　　10．磨製石斧　　11．小形磨製石斧

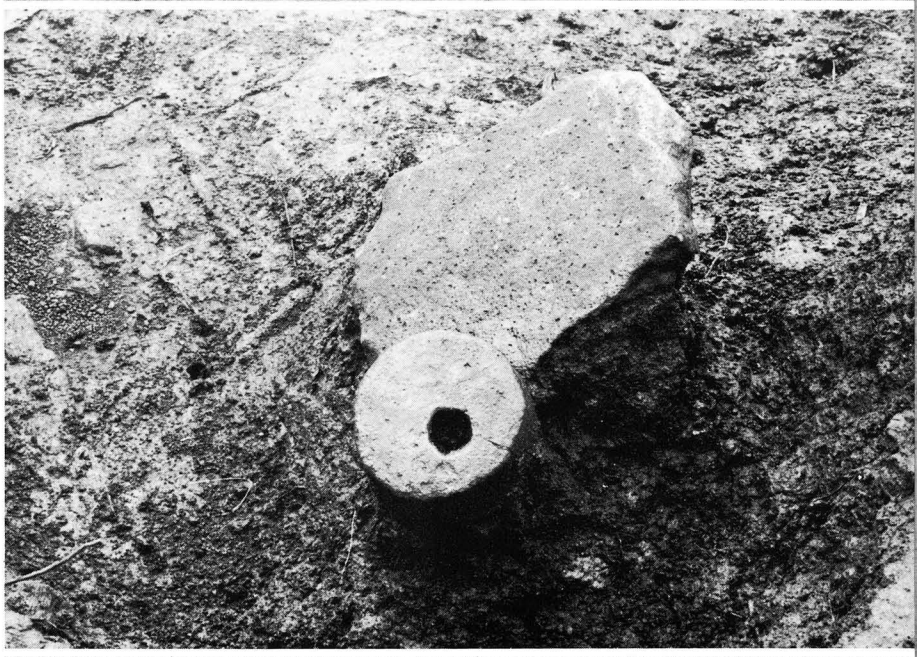
第6図　石器実測図

1．全　　景
（南東より）

2．全　　景
（東より）

3．1号土壙
（北より）

4．7号土壙
（東より）



5．265号ピット
（北より）

6．剥片集中部
（西より）

註　　記

註１　仙台市開発局『茂庭住宅団地環境影響評価　現境編・環境影響評価編』1976

註２　仙台市教育委員会『茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報』「仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ」1980

註３　札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告XIV』1977

註４　今井啓爾他『霧ケ丘調査団』1973

註５　仙台市教育委員会『仙台市茂庭住宅団地計画地内文化財分布調査報告』1977

発　掘　参　加　者

嶺岸倉治・石垣富一郎・細川　隆・太田平治・佐藤　正・住吉惣右ェ門・長尾きよみ・大井ふみよ・嶺岸さかえ・板山つねよ・佐藤喜恵子・根本ときわ・鈴木みつ子・嶺岸たけよ・嶺ハル子・太田ゆき子・桜井信子・庄子勝子・嶺岸わくり・佐藤勢子（以上本郷・生出地区）　沼田今朝夫・佐藤わくり・佐藤いつ子・佐藤しげ子・太田恵知子・沼田とし子・玉川可奈・鈴木洋子（以上梨野・綱木村区）　阿部正也・南雲直二・南雲祐美・横山利男・横山由紀恵・大本春子・清野仁子・千葉きよ子・武田藤雄・武田美津子・吉川明宏・佐々木やえ子・成田　寿・三浦チヅ子・松浦光子・中根ミチ子（以上折立地区）　佐藤栄子・後藤タミ・早川笙子・村山タマ子（以上宮城町）　佐藤広史（東北大学院生）　熊谷信一・木戸春夫・高橋研一・長島栄一石垣純子・天野エリ子・斉藤真理・蛯原千賀子・叶　文俊・佐藤栄作・真壁三郎（以上東北学院大学生）　長谷川　徹（駒沢大学生）　（順不同）

職　員　録

社会教育課

課長	永野昌一
主幹	早坂春一

文化財管理係

係長	鈴木昭二郎
主査	鈴木高文
主事	山口宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長（兼）	早坂春一
教諭	加藤正範
主事	田中則和
〃	結城慎一
〃	柳沢みどり
教諭	青沼一民
主事	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	吉岡恭平

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙　台　城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅰ（昭和55年３月）
第22集　経　ヶ　峯（昭和55年３月）
第23集　年　報　１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第28集　年　報　２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）

仙台市文化財調査報告書第31集

昭和55年度

仙台市開発遺跡調査報告Ⅱ

昭和56年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　ＴＥＬ63－1166